

ISSN 2758-8602

ちひろ美術館・東京

美術館だより

No.226

2025.10.17



装いの翼 いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子

2025年10月31日(金)~2026年2月1日(日)

主催: ちひろ美術館

協力: 岡上淑子、岡上容子、宮崎治、行司千絵、岩波書店、鈴木恵子、東京国立近代美術館、東洋英和女学院史料室、The Third Gallery Aya

後援: 絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、杉並区教育委員会、西東京市教育委員会、練馬区

いわさきちひろ(1918-1974)、茨木のり子(1926-2006)、岡上淑子(1928-)は、第二次世界大戦後、それぞれ、絵本画家、詩人、美術作家として活動しました。本展では、行司千絵・著『装いの翼おしゃれと表現と——いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子』(岩波書店、2025年)を起点に、装いをテーマに彼女たちがそれぞれに求めた美に迫ります。

いわさきちひろ

いわさきちひろは、大正デモクラシーの機運が高まる東京で、当時、興隆した児童文化を享受し、恵まれた幼少期を過ごしました。絵を描くことが好きだったちひろは、絵雑誌「コドモノクニ」を愛読し、夢を重ねます。女学校に入り、洋画家の岡田三郎助に師事して本格的に絵を学ぶようになると、絵を描いて生きていくことを望みましたが、戦争と家制度に阻まれます。第二次世界大戦後、子どもの本を舞台に画家として活動を始め、結婚し、子どもを育てながら、研鑽を積みました。ちひろは生涯、子どもをテーマに描き続けました。ときには語りかけながら子どもを描き、趣向を凝らした服を着せています。そこには、ちひろのファッショセンスとともに、子どもを慈しむまなざしが重ねられているようです(図1・2)。



図1 いわさきちひろ バラと少女 1966年

絵本画家として地歩を固めたちひろは、1966年、取材旅行を兼ねて、母と一緒にヨーロッパをひと月ほど旅します。旅先で描いたスケッチには、彼女の関心が映し出されていました。風光明媚な景観よりも、そこに暮らす人々に共感し、日常の情景を数多く描き留めています。行き交う人の装いのディテールからそれぞれの人生が垣間見られるようです(図3)。旅にあたって、ちひろはお気に入りのブティックで



図3 いわさきちひろ
トレド 石畳を歩く女
1966年4月7日



図4 ちひろ フランス、ルーヴンの町かどで
1966年

あつらえたコートやスーツで自身の装いも楽しみました(図4)。

ちひろが描く子どもの絵は、ときには画家仲間から「甘い絵だ」と批判されることもありました。

しかし、ちひろは「どんなにどろだらけの子どもでも、ボロをまとっている子どもでも、夢を持った美しい子どもに、見えててしまう」と語り、自身が感じる美をゆるぎなく描き続けました。それは、彼女の装いにも通じ、55歳で亡くなるまで、どこか少女のようなみずみずしさのある装いを好みました。

茨木のり子

茨木のり子は、「わたしが一番きれいだったとき」など、戦後の混乱期を生きた女性の心情を代弁する詩から、「現代詩の長女」とも称され、気骨のある詩人として知られています。私人としては、レシピを研究してプロ顔負けの凝った料理をつくり、住まいを洒脱に心地よく整え、幼少期から培われた審美眼で買い物を楽しみました。イッセイミヤケのコットンのメンズシャツや、イタリアの高品質なブランド、ヘルノのシルクウールのスーツを着こなすと同時に、自宅に設えた家事室でミシンを使って洋服づくりを研究し、リメイクにも挑戦し、装うことを楽しみました(図5)。



図5. のり子 ワンピースにクロッシュを合わせた装いで 1956年

「言葉の流行とファッションの流行とは、どこかで通いあうものを持っていく」と語ったのり子は、日常のことばの端々にまで鋭く洞察を深め、美を追求し続けたように、くらしや装いにおいても、真摯に、柔軟に、ときにはユーモアを交えながらも、自身の感覚にじむ気品

を備えた美しさを求めました。心を動かされたものへの探求と細やかなまなざしは一貫していました。のり子が79歳で逝去した後、49歳のときに死別した最愛の夫への想いや、共に過ごしたかけがえのない時間を結晶化した39篇の詩が発表されました。そこには、愛するものに真摯に向き合い続けたのり子の表現の核となる部分が浮かび上がっています。

岡上淑子

岡上淑子は、1950年から56年までの約7年の間に、約140点の独自のコラージュ作品を制作しています。美術作家・美術評論家で詩人の瀧口修造に見出され、活動をした後、長らく美術の世界とは距離を置いていました。彼女の作品が再び脚光を浴びたのは、2000年のことでした。以後、現在に至るまで、国内外で作品が展示され、再評価されています。

淑子のコラージュ作品は、一見すると写真作品のように見えますが、写真誌「LIFE」やファッション誌「VOGUE」などのモノクロ写真を素材とし、切り抜いたものを緻密に貼り合わせることで、不合理なイメージを現出させています。1950年代のモードを色濃く映した女性像は、コラージュの魔術で不思議な夢のようなイメージをまとい、時代を超えた魅力を放っています(図6)。



図6 岡上淑子 彷徨 1956年 個人蔵
©OKANOUE Toshiko (Courtesy of The Third Gallery Aya)

淑子自身が好きな作品として《海のレダ》(図7)を挙げて、こう語っています。「女の人は生れながら順応性を与えられているといいますが、それでも何かに変っていく時にはやはり苦します。そういう女の人の苦悩をいたたかたのです」³タイトルから、古来より多くの画家が画題としてきたギリシャ神話の一節、最高神ゼウスが白鳥の姿となり、スバルタ王の妻レダを誘惑する物語を想起させます。この作品では、白鳥を抱きかかえ、一体化して、大海原でしぶ

きをあげて前進するイメージが現れ、現代社会で活躍する女性の優美で颯爽とした姿にも重なります。



図7 岡上淑子 海のレダ 1952年 個人蔵
©OKANOUE Toshiko (Courtesy of The
Third Gallery Aya)

響き合う3人のまなざし

ちひろ、のり子、淑子のあいだに交流はありませんでしたが、彼女達の人生と作品をたどると、共通する部分が見えてきます。彼女たちは、それぞれに恵まれた幼少期を過ごし、文化的な環境のなか

わたしが一番きれいだったとき
だれもやさしい贈物を捧げてはくれなかつた
男たちは拳手の礼しか知らなくて
きれいな眼差だけを残し皆發つていつた

わたしは一番きれいだったとき
わたしはとてもふしあわせ
わたしはとてもとんちんかん
わたしはめっぽうさびしかつた

わたしが一番きれいだったとき
わたしの頭はからっぽで
わたしの心はかたくなで
手足ばかりが栗色に光つた

だから決めた できれば長生きする」とい
年とつてから凄く美しい絵を描いた
フランスのルオ一翁さんのように
ね

で美意識を培い（図8～10）、戦争のただなかで青春時代を送りました。『装いの翼』の著者、行司千絵は、「生きるか死ぬかの厳しい状況に直面したとき、そのひとの価値観が顕わになるのかもしれない」と記し、彼女たちが戦時中に見つめたものに注目しています。食糧が窮乏するなか、ちひろは銀座の百貨店で、美しい絵皿を求めて帰り、家族にあきれられ、防空壕にそっとしましたといいます。のり子もまた、美しいものに憧れを募らせていました。女学校を卒業し、薬学を学ぶために、郷里の愛知県から上京したのは敗戦の2年前でした。行司は「このころ、のり子の唯一の楽しみは星空を見ることだった。戦禍のなかに残されたたったひとつの美と感じた」と記し、勤労動員に向かうリュックのなかに星座早見表を忍ばせていましたことを紹介しています。

淑子が東京の女学校に入学した翌年か

ら、全校生徒がもんぺを着て防空頭巾を持参するようになったといいます。戦時 下にあっても女学生たちがささやかなおしゃれを楽しんだ様子を淑子は今も鮮明に覚えているといいます。3人が目の当たりにした空襲を受けた東京の惨状はそれぞれの胸に深く刻まれたことでしょう。敗戦後、彼女たちが作品を発表し、表現を模索し始めたのはどのような時代だったのでしょうか。のり子は、エッセイのなかで1951年を回想して「戦後のこの時期は、あらゆる分野で閉ざされていた研究欲、表現欲が堰を切ったように溢れ出ようとしていた」⁴と語っています。民主的な運動が興隆する時代の奔流のなかで、しなやかに、そしてゆらぐことなく自らの美を探求した彼女たちにとって、装うことは、暴力に抗い、自由と平和を表明し、世界へ羽ばたくための翼だったといえるのかもしれません。

(原島 恵)



図9 10歳の誕生日を迎えたの
り子 1936年



図 10 小学生の淑子
母の千鶴子と



図8 母・文江の手づくりワンピースを着た8歳のちひろ(右端)と妹たち 1926年

いわさきちひろ Chihiro Iwasaki (1918-1974)

画家。1918(大正7)年、福井県武生町(現・越前市)に生まれ、東京で育つ。東京府立第六高等女学校卒業。藤原行成流の書を学び、絵は岡田三郎助、中谷泰、丸木俊に師事。1950年松本善明と結婚。翌年長男猛誕生。子どもを生涯のテーマとして描き、絵本に『おふろでちゃぶちゃぶ』(童心社)、『あめのひのおるすばん』、『ことりのくるひ』(至光社)、『戦火のなかの子どもたち』(岩崎書店)など。

茨木のり子 Noriko Ibaragi (1926-2006)

詩人。1926（大正 15）年、大阪で生まれ、6歳のときに医師である父の転勤により愛知県幡豆郡西尾町（現・西尾市）へ移住。帝国女子医学薬学専門学校（現・東邦大学薬学部）卒業。24歳で詩作活動を開始し、川崎洋と同人「櫂」を結成。谷川俊太郎・岸田衿子・大岡信らとともに詩壇を牽引する。詩集に『対話』（不知火社）、『見えない配達夫』（飯塚書店）、『自分の感受性くら』（花神社）、『偽りかからず』（筑摩書房）など。

岡上淑子 Toshiko Okanoue (1928 -)

美術作家。1928(昭和3)年、高知県生まれ。文化学院デザイン科卒業。22歳から約7年間独自にコラージュを制作。瀧口修造に見出され、1953年、タケミヤ画廊で初の個展。同年、「抽象と幻想」展(東京国立近代美術館)にも出品。2000年、44年ぶりの個展「岡上淑子フォト・コラージュ—夢のしずく—」開催後、国内外で作品を展覧。2018年、初回顧展「岡上淑子コラージュ展—はるかな旅」を高知県立美術館で開催。

* 1 いわさきひろ 表紙絵について「子どものしあわせ」(草土文化) 1963年3, 4月合併号より
* 2 茨木のり子 おいてけばり「ハイファッショーン」(文化出版局) 1976年12月号より

*2 淡木のり子 おいてけほり「ハイノッシュン」(文化出版局) 1976年
*3 岡上淑子 夢のしづく「美術手帖」(美術出版社) 1953年3月号より

*3 岡上淑子 夢のしづく「美術手帖」(美術出版社) 1953年3月号より
*4 萩木のり子 いちど視たものの「女性と天皇制」(思想の科学社) 1979年

* 4 茨木のり子 いちど見たもの『女性と天皇制』(思想の科学社) 1979年7月より

2025年8月3日(日) アーサー・ビナード講演会 「時計をどこまで巻き戻せばいいのか」

今年7月に刊行された『1945年8月6日 あさ8時15分、わたしは』^{*1}に文章と詩をよせたアーサー・ビナードさん(詩人)の講演会を開催しました。一部を紹介します。
(宗像仁美)

過去に分け入り、つかむ

僕の義母は、軍国少女だった。当時の「決戦日記」には鬼畜米英への敵意が描かれ、御国のために頑張っている姿勢が鮮やかだ。しかし、1945年の夏を境に180度転回、自分をつくり変えなきゃいけなかった。義母をはじめ、その時代を生き延びた先輩たちは、感覚的な破綻があり、僕らはそれをつかむ必要がある。たとえば、古い紙芝居を掘り起こしてみる。『クウシフ』^{*2}は、空襲のとき子どもは防空壕へ入り、大人は消火活動を、と楽しく教える。空襲が始まる2年前から各地で上演され、みんなにインストールされた。そして、東京大空襲。ひと晩で10万人の庶民が焼き殺され、そこで、どうも紙芝居と現実が違う、となった。生き延びた人は、こっそり「防空壕に入っちゃいけない」「消火活動なんかしちゃだめ」といった。常識をアンインストールするために想像を絶するような悲劇が必要で、できない人もいたはず。こんな

話を絵本にできたらと思う。100年ほどのスパンで過去に分け入り、体験を掘り起こしていきたい。

『1945年8月6日 あさ8時15分、わたしは』

1967年に刊行された『わたしがちいさかったとき』^{*3}という本を土台にして、2025年の今しかつくれない絵本を生み出そうと、童心社の編集者、あまんきみこさんと僕も、動き始めた。この新刊での僕の役割は、今とつなげること。体験していない人が、国の違い、時代の違いをどのように越えるか。時代の違いは、いっぱいあるけど、あのとき始まった課題を今もたくさん抱えている。

『さがしています』^{*4}

広島で強烈な体験をした方々から、僕はこの20年の間に話を聞くことができた。でも、広島で出会ったみなさんは奇跡の人。命がつながったことがミラクル。一般の人たちが体験したのは「死ぬ」ことだった。では、どうやって奇跡じゃない人の話を聞いたらいいかと、再び訪れた平和記念資料館で考え、ものが語ることもありうると気づいた。そこから始まったのが『さがしています』という絵本。生き残りたいからつくった。どうすればこの困難な今を乗り越えてい

けるのか、今もさがしている。

紙芝居『ちっちゃい こえ』^{*5}

ちひろは、子どもたちと共有したいすばらしいものを描いた。核のテクノロジーとは真逆の、生き物の世界を捉えた。これが丸木夫妻との大きな共通点。紙芝居をつくっている途中、建物の絵を入れたくなり、あの広大な「原爆の図」15点をくまなく探したけど、建物はない。広島といったら、原爆ドームのように壊れた建物のビフォア・アフターの表現をすることが多いけど、「原爆の図」は違う。大事なのは、人間のビフォアとアフター、生き物のいのちがどうなるかだ。紙芝居をつくるまで僕は、「原爆の図」をここまで読めていなかった。でもあの時代を共に生きたちひろは、たぶん把握できていた。どうやったら僕らも、本質を奥までつかめるか、みんなといっしょに工夫できたらと思う。



『ちっちゃい こえ』を演じるアーサー・ビナードさん

対談 武田美穂(絵本画家) × 松本猛(ちひろ美術館常任顧問) 「絵本は何をどこまで語れる?」

9月14日、武田美穂さんと松本猛による対談が行われました。展示中の『ねんどの神さま』の話を中心に報告します。



松本: この絵本を作家・那須正幹さんと制作することになったのはなぜですか?
武田: ポプラ社の編集者と那須さんが平和の本をつくるプロジェクトを立ち上げた際に、依頼がありました。そのとき、那須さんからは、「今まで描いてきた絵本とは違うアプローチができるから。好きにやりなさい」といわれました。

松本: ロングショットやクローズアップなどを使った場面は、映画を意識した?
武田: 根底にはあります。ただ、絵本でしかできない表現については、いろいろ考えました。右から左に頁をめくると、画面の左奥にパトカーが見えて視線を移動していくような。絵本のめくりなどは意識して描きました。

松本: 絵本は静止画面ですから、ひとつひとつの絵を見ながら、そのなかに自分が入り込んでいくことができる。この絵本は一枚絵としての力があるのでじっくり

り見てほしい。画材はガッシュですか?
武田: ガッシュ(不透明水彩)から、アニメ用の塗料、クレヨン、パステルなどあらゆるもの導入して描いています。文章を読み、今まで自分が慣れ親しんできた描き方とは違うアプローチを考えました。もともと油絵を描いていたので、そのような描き方も利用して新しい表現にたどり着きました。

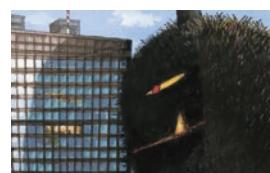


図1 武田美穂『ねんどの神さま』(ポプラ社/文・那須正幹)より 1992年

松本: 今も世界中で戦争や紛争が続いているなかで、作家や編集者たちは子どもたちに平和の問題を伝えなければいけないという意識があり、このような本の出版は続いている。兵器会社の社長となつた主人公が、粘土細工の姿に戻ったねんどの神さまを壊すという結末を那須さんが選んだのは、これを書かざるを得ないという思いがあったのだと思います。

武田: 那須さんに「つらいですね」といたら、「戦争はこんなもんじゃない」と笑われて。今もねんどの神さまは壊され

続けている、平和にはほど遠いと伝えたかったのだと思います。また、絵本をすごくわかっていて。文章に見事な桜の描写があったので桜を描いたら、「絵があるならいいや」と文章を削るんです。

松本: 絵本はことばだけの世界ではなく、絵と一体化した表現だと思います。今年、那須さんが遺した未発表の合唱曲の歌詞をもとに、武田さんが絵を描いた『やくそく』(図2)が出版されました。武田: 主人公の少年と、その少年を原爆で亡くなった兄と思い始めた祖母との交流を描いた絵本です。現在の姿や場面はカラーで、過去はセピアで描きました。「死んだ人にまちがわれるなんて」と思いながらも、少年はおばあちゃんが大好き。だから、「ぼくらはぜったい戦争なんかしない」と決意します。やさしい反戦

なんです。人間の根源的なやさしさとか。

松本: 拳を振り上げて反戦を叫ぶだけではなく、僕はいろいろな形の本がっていいと思っています。
(宮倉恵美子)

2025年



2025年

*1 『1945年8月6日 あさ8時15分、わたしは』原爆を体験した子どもたち 言葉/いわさきちひろ 絵 童心社

*2 紙芝居『クウシフ』高橋五山 作/青木未男 絵 全甲社紙芝居刊行会 1943年

*3 『わたしがちいさかったとき』長田新 編『原爆の子』他より/いわさきちひろ 絵 童心社 1967年

*4 『さがしています』アーサー・ビナード 作/岡倉禎志 写真 童心社 2012年

*5 紙芝居『ちっちゃい こえ』アーサー・ビナード 脚本/丸木俊・丸木位里 絵「原爆の図」より 童心社 2019年



6月22日（日）
被爆80年の今年、戦争は続いている…司修さんの絵の女の子は、ウクライナ、ガザ、イラン、イスラエルにも…と思うと、つらい気持ちになります。平和な世界と子どもの幸せを。ちひろさんの絵のやさしい愛に、心が少し楽になりました。 広島より 順子

6月26日（木）
いつもは1歳になった娘と来ていますが、ひしぶりにひとりでゆっくりと見てまわりました。子どもをもってからちひろさんの絵がもっと好きになり、あかちゃんの絵を見るとかわいくて涙が出そうになります。今回の企画は、戦争について。『まちんと』を娘と重ねて、これから私たち、そして子どもたちの暮らす世界が平和にな

ってほしいと願います。 ウエマ
7月13日（日）

40年ぶりです。小2の孫を連れて。引っ越ししたり古くなったりで、ちひろの本もほとんど手放しましたが、ひしぶりに『ぼちのきたうみ』の題名を目にしたとたん、胸がいっぱいになりました。どれも全部懐かしい。流されるような日々のなかで、立ち止まる時間があります。 裕子

8月3日（日）

70年の歳月のなかで出逢い支えてもらった、たくさんの絵本と再会しました。私の日々のなかに当たり前にあった絵本たち。当たり前にあった平和への希求、いのちの尊さへの思い、動くことの喜びを絵本と共有していたんだな、と思いました。どうぞこれからを生き

る若い方々も、友となるたくさんの方と一緒に生きてください。

8月6日（水）

わたしは、はじめてここにきたときとてもわくわくしました。わたしは、ほんをよむのがだいすきです。だからまいにちここにきたいなどおもいました。えほんのないようはおもしろい、かなしいことがこころにつながって、このほんをかいたひとはすごいなとおもいました。わたしはそのひから、たくさんのはんがすきになりました。ちひろびじゅつかんありがとうございます。がんばってね。 E.S.

8月17日（日）

家族4人で来訪。長女小6の、戦後80年を家族で考えるという夏休みの課題のために。戦後が永遠に続きますように。 美貴子



6月19日（木） ☺

5月に来館した近隣の小学生たちからお礼の手紙が届く。子どもたちそれぞれのことばで、印象に残った展示内容がつづられている。授業での鑑賞が、美術館の楽しさに触れるきっかけとなっていたらうれしい。これからも地域との連携を大切にしていきたい。

7月26日（土） ☺

この日から始まった展覧会では、戦争や平和を描いた絵本を紹介する特設の棚が展示室や図書室につくられ、一面に絵本が並ぶ。



「ちひろ美術館 平和を考える絵本 150冊」リストは 公式サイトでも公開中。



8月15日（金） ☺のち ☺

絵本カフェの看板メニュー、いちごのパフェアが数年ぶりに復活。暑さの続く日々、展示を楽しんだ後、ちひろの思い出の味とともに涼しい館内で一息ついていかれる方も多い。

8月30日（土） ☺

絵本でつなぐ「へいわ」展示関連イベントとして「Silent Fallout」上映会を開催。女性たちの行動が大統領を動かし、アメリカでの大気圏内核実験が中止されたことに取材したドキュメンタリー映画の上映後、伊東英朗監督によるオンラインでのトークが行われた。ア

メリカでの上映会も行ってきた監督は、核兵器をつくる過程では敵味方の別なく放射能に晒されるため、世界中の人が当事者であり、ひとりひとりがその意識をもって行動していくことが重要と語る。参加者からは「知る機会を得られてよかったです」「自分にできることを考えたい」との声が寄せられた。

9月10日（水） ☺ 時々 ☺

開館48周年の記念日。たてもの探検ツアーが始まるころには雨も上がり、ケヤキの緑と外壁の色調があざやかな美術館の姿を楽しむことができた。



いわさきちひろ
『あかちゃんのうた』
1971年

「今度、ちひろさんの作品をお持ちしたいと思います。」ちひろ美術館を30年以上に渡り支え続けてくださっている支援会員（2011年までは「友の会」）のMさんよりご連絡をいただいたのは、今年6月初旬のことでした。

お見せいただいた作品は『あかちゃんのうた』（松谷みよ子文 1971年 董心社）の1枚。長年親交のあった、ある作家の方からもらい受け以来、ずっと大切にしてこられたものの、作品の劣化が心配になり、温湿度管理が整った当館にご寄贈を決意された、とのこと。その作家さんが作品を入手したきっかけは「子どもの文化研究所」でのご講演だったそうで

す。同研究所を創設した稻庭桂子さんは、ちひろが画家として立つ決意をした紙芝居『お母さんの話』（董心社）の編集者でした。詳細ないきさつは不明ですが、描かれてから半世紀以上を経た作品は、人々の手から手へ大切に受け継がれて、帰ってきたのでした。

『あかちゃんのうた』は、あかちゃんに語りかけるお母さんのことばがそのままリズムを持ち、かたちになった絵本です。生まれて初めて出会うものに目を見開くあかちゃんの

表情や愛らしいしぐさを、ちひろはやわらかな鉛筆線で巧みにとらえています。なお原画17点のうち、当館の所蔵は今回のご寄贈作品を含む9点と習作8点。残る原画8点は、現在も所在が不明です。

（中平洋子）



ちひろ美術館・東京イベント予定 各イベントのご予約・お問い合わせは、ちひろ美術館・東京イベント担当へ。

掲載内容は予告なく変更する場合があります。最新情報につきましては、公式サイトをご覧いただくか、お電話にてお問い合わせください。
TEL.03-3995-0612 chihiro.jp   

〈装いの翼 いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子 展示関連イベント〉

●行司千絵 特別ギャラリートーク

○日時：10月31日（金）14:00～14:30

○講師：行司千絵（新聞記者、『装いの翼』著者）

○聞き手：当館学芸員

○参加費：無料（入館料別）／申し込み：不要

本展企画の起点となった書籍『装いの翼 おしゃれと表現と——いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子』（岩波書店）の著者・行司千絵が取材や執筆を通して感じたことや展覧会の見どころをお話します。

ちひろが懇意にしていたブティック、ルネであつらえたコート
撮影：大塚愛



●トークイベント

甥夫婦が語る素顔の茨木のり子

○日時：11月22日（土）14:00～15:30

○講師：宮崎治（茨木のり子甥）、薰（甥の妻）

○聞き手：行司千絵（新聞記者、『装いの翼』著者）

○会場：【ちひろ美術館・東京】

定員：40名／参加費1200円（入館料別）

【オンライン】定員100名／参加費900円

○申し込み：要事前予約（10/22（水）より公式サイト、TEL.にて）
『茨木のり子全詩集 新版』（岩波書店・2025年9月刊行）の編者であり、茨木のり子の甥・宮崎治とその妻・薰が、詩人の素顔とその魅力について語ります。

●松本猛ギャラリートーク

○日時：12月21日（日）14:00～14:40

○参加費：無料（入館料別）／申し込み：不要

いわさきちひろのひとり息子・松本猛によるギャラリートーク。展示作品を見ながら、母・ちひろとの思い出や展示の見どころなどをお話します。

●絵本カフェ特別メニュー

老舗京菓子店「塩芳軒」（京都市上京区）が手がける展覧会オリジナルのお干菓子「装いの翼」を、絵本カフェにて提供します。カフェ限定フレーバーを塩芳軒オリジナルのお煎茶と共にお楽しみください。

●新刊／展示関連書籍

「装いの翼 おしゃれと表現と——いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子」

行司 千絵・著／岩波書店

定価2,640円（本体2,400円+税10%）

日々の装いを大切にし、暮らしの中で
も美を愛おしんだ、三人の表現者。丹
念な取材から浮かび上がる、それぞれ
の服と人生の物語。



〈会期中のイベント〉

●わらべうたあそび

○日時：11月1日（土）

11:00～11:40

○講師：服部雅子

（西東京市もぐらの会
代表・はとさん文庫主宰）

○対象：0～2歳児と保護者

○定員：8組16名

○参加費：無料（入館料別）／

申し込み：要事前予約
(10/1(水)より公式
サイト、TEL.にて)



いわさきちひろ おもちゃとハイハイしようとするあかちゃん 1967年

●「いい育児の日 11月19日」関連イベント

・出張「子育てのひろば」

○日時：11月19日（水）10:30～15:30

○参加費：無料（入館料別）／共催：NPO 手をつなご

経験豊富な保育の専門スタッフがたくさんのおもちゃをご用意してお待ちしています。子育ての相談をしたり、親子で遊んだり、保護者同士が交流したり、自由にお楽しみください。



・ファーストミュージアム あかちゃんとおでかけ

あかちゃんとといっしょに、展覧会や館内を親子で楽しみましょう。（プログラムの詳細は決まり次第公式サイトに掲載します）

●明日はちひろの誕生日！

○誕生日当日の12月15日（月）は休館日のため、前日の12月14日（日）にご来館のみなさまに、ちひろのことばカード（非売品）をプレゼントします。

●成人の日特典

○2026年1月3日（土）～12日（月・祝）まで、新成人の方は無料でご入館いただけます。

●ギャラリートーク

○第1・3土曜日 14:00～14:30

○参加費：無料（入館料別）／申し込み：不要

●絵本のじかん

○第2・4土曜日 11:00～11:30

○参加費：無料（入館料別）／申し込み：不要

協力：NCBN（ねりま子どもと本ネットワーク）

季節や展示にあわせ、毎回テーマにそった絵本の読み聞かせを行います。あかちゃんから大人まで、どなたでもご参加いただけます。

CONTENTS 〈展示紹介〉装いの翼 いわさきちひろ、茨木のり子、岡上淑子…②③／〈活動報告〉アーサー・ビナード 講演会「時計をどこまで巻き戻せばいいのか」／対談 武田美穂×松本猛「絵本は何をどこまで語れる？」…④／ひとことふたことみこと／美術館日記／新収蔵作品紹介…⑤

美術館だより NO.226 発行 2025年10月17日